

## 実践報告

# トーンチャイムアンサンブルの教育的意義 — 保育士養成課程における実践を通して —

## Educational Significance of Tonechimes Ensemble — A Practice in Childcare Worker Training Courses —

田 中 路

キーワード：トーンチャイム、アンサンブル、保育士養成課程、発達の最近接領域

### はじめに

本稿は、保育士養成課程の学生によるトーンチャイムアンサンブルの実践の様子をまとめ、その実践が養成課程の学生にどのような成長をもたらしたかについて考察を行うとともに、トーンチャイムの教育的意義を検討するものである。

### 1. トーンチャイムの特徴と教育的意義

#### 1-1. 楽器の概要

トーンチャイムは、製造元によって他にもクワイアチャイム、ハンドチャイムと称される。構造に多少の違いがあるものの、これらはほぼ同一の楽器と考えて良い。楽器の発祥としては、1970年代後半から1980年代初頭にかけて、アメリカでクワイアチャイムとして考案されたのがはじまりであり、比較的新しい楽器であることが分かる<sup>1</sup>。

アルミニウム製の棒を持って振ると、固定されたクラッパーと呼ばれる部分が棒を叩いて音が出る。クラッパーの先はフェルトで覆われており、これで叩くことで柔らかな音色を生み出す。またアルミニウム自体も柔らかい金属であるため、もともと大音量を出すことは想定されておらず、比較的静かでシンプルな音色の音楽によく合う。横に入れられた切込みの長さで音程が決まる。

奏法は単純で、楽器を縦に握り、クラッパーが棒を叩くように、腕を自分の前に向けて振る。肩と同じくらいの高さまで上げ、胸の位置まで戻すようにすると音がよく響く。大きいもの(低音部)は両手で持っても良いが、専用のケースに立てかけておき、マレットで直接叩く方法が推奨されている。

演奏原理、奏法とも、ハンドベルとよく似ている。実際、クワイアチャイムを考案したアメリカのマルマーク社は、もともとクワイアチャイムをハンドベル導入用の基礎楽器と位置付けていたが<sup>2</sup>、後に奏者の要望によって独立した楽器となった。現在は、ハンドベルに比べて安価であることや、扱いが容易であることなどが理由で、クワイアチャイムの普及率がハンドベルのおよそ5倍にのぼっているという<sup>3</sup>。

#### 1-2. 日本における活用

クワイアチャイム、ハンドチャイムに比べ、日本においてはスズキ楽器製のトーンチャイム(写真1)がよく使用される。スズキ楽器のウェブサイトによれば、使用される場合は個人の演奏愛好家の他、学校、教会、養護施設などが多いという<sup>4</sup>。クワイアチャイムと同様、ハンドベルの導入用、あるいはハンドベルとのアンサンブル用に活用することも多いので、ハンドベルと切り離せないキリスト教音楽を演奏する

教会で多く用いられる。また養護施設では、身体に障がいがあり重い楽器を扱えない利用者でも、少しのサポートで簡単に音を鳴らすことができるので、音楽療法としてもトーンチャイムが活躍している。



写真1. スズキ楽器製のトーンチャイム

### 1-3. 教育現場での活用

一方、幼稚園や小学校などの音楽教育の場でもトーンチャイムは取り込まれている。既に述べたように、奏法が単純であり容易に音が出ること、また楽器としては比較的安価で丈夫であることなどが理由であるが、トーンチャイムのもつ大きな教育的意義にも注目したい。それはアンサンブルを通して「協働」する体験に大変適しているという点である。

一般に教育現場の音楽教育における演奏では、子どもたちは合唱や合奏を体験するが、大人数で同じことを演奏する、あるいはパートに分かれて数人ずつで同じことを演奏するケースがほとんどである。一方トーンチャイムは、1人に数本ずつ音を割り当て、基本的に同じ音を演奏する人はいない。自分が鳴らさなければ、その音は音楽から欠けるのである。正しく鳴らすという緊張感、自分の代わりはいないという責任感を、音楽を通して実感できる体験になるだろう。

これらのことが個々に対する教育的意義だとすれば、集団に対する教育的意義も大きい。曲

の最初に、皆で見合って演奏を始めたり、和音の構成音が多くなるところでは、同時に鳴らす他者と息をそろえたりすることが必要になる。モーションが単純だからこそ、この「皆で合わせる」ということに注力することができる。

このように、他の形態の合唱、合奏では直接的な体験が難しいことでも、トーンチャイムが可能にすることはある。次項では、トーンチャイムの実践が保育士養成課程の学生にどのような成長をもたらしたかについて、実践報告としてまとめたい。

## 2. 保育士養成課程における実践

### 2-1. 実践の概要

東京純心大学現代文化学部こども文化学科は、4オクターヴ半のトーンチャイムを2セット所有している。2から3オクターヴで簡単な曲が演奏できる中、広い音域のトーンチャイムを所有しているケースは珍しい。これを活用して、学生は様々な行事において演奏を経験することができるが、中でも学科行事である「純心こどもの国のクリスマス」では、招待した近隣の子どもたちを前に、ステージでアンサンブルを披露する。授業およそ13回をかけて練習し、大きなステージに上ることは、多くの学生にとって初めての経験であり大舞台である。主に1年次の必修科目「こどもと音楽表現」の授業でこの実践を行うので、学科の学生は全員が一度は必ずトーンチャイムアンサンブルを経験することになる。

令和5年度は、以下のような計画で実践を行った(表1)。従前の必修科目「こどもと音楽表現」に代わり、令和5年度からは「こども文化特講F」においてトーンチャイムアンサンブルを扱うこととなった。選択科目となったが、2～4年次、合計31名と、学科全体の人数からみて大変多くの学生が履修した。

4オクターヴ半のトーンチャイム1セットに対し、適した演奏人数は15名程度である。そのためクラスを2グループに分け、2部屋で同

表1. 令和5年度 こども文化特講Fの授業計画

回数	授業日	授業内容
1	9月26日(火)	オリエンテーション：授業の概要、授業の進め方などについての説明 トーンチャイムの基礎(音の鳴らし方、止め方、演奏姿勢)
2	10月3日(火)	トーンチャイムの合奏(1)：譜読み
3	10月10日(火)	トーンチャイムの合奏(2)：楽曲の練習(部分練習)
4	10月14日(土)	トーンチャイムの合奏(3)：楽曲の練習(強弱、速度などの表現の工夫)
5	10月17日(火)	トーンチャイムの合奏(4)：楽曲の練習(強弱、速度などの表現の工夫)
6	10月24日(火)	トーンチャイムの合奏(5)：「純心こどもの国のクリスマス」に向けた全体練習
7	10月31日(火)	トーンチャイムの合奏(6)：「純心こどもの国のクリスマス」に向けた全体練習(部分練習)
8	11月7日(火)	トーンチャイムの合奏(7)：「純心こどもの国のクリスマス」に向けた全体練習(強弱、速度などの表現の工夫)
9	11月11日(土)	トーンチャイムの合奏(8)：「純心こどもの国のクリスマス」に向けた全体練習(通し練習①)
10	11月14日(火)	トーンチャイムの合奏(9)：「純心こどもの国のクリスマス」に向けた全体練習(通し練習②)
11	11月21日(火)	トーンチャイムの合奏(10)：「純心こどもの国のクリスマス」のリハーサル①(入れ替えの練習)
12	11月27日(月)	トーンチャイムの合奏(11)：「純心こどもの国のクリスマス」のリハーサル②(講堂でのリハーサル)
13	11月28日(火)	トーンチャイムの合奏(12)：「純心こどもの国のクリスマス」のリハーサル③(講堂でのリハーサル)
14	12月3日(土)	純心こどもの国のクリスマス(トーンチャイム演奏)
15	12月6日(火)	純心こどもの国のクリスマスの反省

時に練習を行い、教員は行き来して指導にあたることとした。全員経験者であるので、教員が不在の時間も各グループで決めたリーダーを中心に自主練習することとした。

授業は初回(ガイダンス・楽譜配布)、およそ12回にわたる演奏実践、本番、最終回(反省・レポート作成)と、4パートで構成されている。初回、本番、最終回以外は毎回練習が続く。譜読みから本番に至るまでの実践の工夫について、次項で言及したい。

## 2-2. 実践における工夫

全員が経験者とはいえ、学生の音楽経験には

かなりの差がある。多様な音楽経験の学生を一斉に指導するために、本実践ではいくつかの工夫をしてきた。

### ①選曲

練習に費やす12回という授業回数は、期間にすれば3か月程度に過ぎないが、集中的に練習を行うために補講なども入れており、この期間はかなり詰め込んで練習する感を学生は持っている。12回集中力を切らさずに、楽しんで練習に向き合うために、選曲は非常に重要である。また「純心こどもの国のクリスマス」の想定する客層は子どもが中心であるため、子ども

たちが聴いて楽しめる曲であるということも重視する必要がある。また、できるだけ色々な曲を経験してほしいというねらいから、過去数年間に取り上げた楽曲はできるだけ選ばないという方針で選曲している。

トーンチャイムは市販の楽譜も存在するが、4オクターヴ半という広い音域のための楽譜は多くない。ハンドベルの楽譜であれば6オクターヴ以上のもも出版されているが、難易度の問題があったり、ハンドベルの楽譜をトーンチャイムで演奏しても音色に違和感がある場合もある。ピアノ譜など編曲の種類が豊富なものを活用する方法もあるが、ピアノとハンドベル・トーンチャイムはボイスンギ（音の積み重ね方）が大きく異なり、ピアノ譜をそのまま鳴らしても物足りない聞こえ方になる。メジャーな楽器とは言い難いため、必要としている条件に合致する市販の楽譜にはなかなか出会えない。

何年か模索した結果、まず、学生から選曲の希望を聞いた上で、その楽曲の市販の楽譜（ハンドベル用）があればそれを参考にし、それで足りない部分はピアノ譜や電子オルガン譜（いわゆるエレクトーン用の楽譜、ちょうど5オクターヴ以内に収まることが多い）を参考に、教員がリアレンジする方法をとってきた。クリスマスの曲の場合は、鈴や打楽器などを加えたアンサンブルにしたこともある。

例年、クリスマスの曲1曲、ディズニーやジブリ、その他アニメ音楽などから1曲、としてきたが、今年度は他のプログラムでクリスマスの楽曲を多く演奏したため、トーンチャイムの楽曲は『ビリーブ』（杉本竜一作曲）、『映画「魔女の宅急便」より 海に見える街』（久石譲作曲）の2曲とした。

子どもたちに耳馴染みがあるということが大切であるが、学生にとって、知っている、口ずさめる曲であるということも大切であるということが、数年の実践で明らかになってきた。読譜の課題と関わるであろうが、知らない曲をゼロから譜読みし、演奏するということが、多く

の学生にとって困難なのである。その点で、今年度のトーンチャイムの2曲は、学生にとっては比較的認知度が高く、譜読みの最初の段階が入りやすかったのではないと思われる。

## ②使用楽譜の工夫

トーンチャイムアンサンブルにおいては通常の五線譜を使用するが、大学入学後に初めて五線譜の読み方を学んだ学生も多く、スムーズな読譜が課題の学生も少なくない。楽譜を素早く、正しく読めることは必要な音楽能力ではあるが、トーンチャイムでは全員担当音が異なるので、読譜の段階で個別指導に十分な時間を割くことは難しい。そこで第1回の授業で楽譜を配布した後、学生が初めに行う作業が、担当音のマーキングである。

今回は1人あたり2～4音を担当した。教員から個別に担当音を伝え、1音につき1色決め、全ての音をマーカーで塗るよう指導する（写真2）。これを全員分指示する。さらに、この時点で塗り忘れや間違いがあると、練習開始後に新しく音を加えたり、逆に鳴らさないようにするといったことは困難であるため、全員分間違いがないかチェックする。これに相当の時間を要するため、初回はここまでで終了するケースが多い。



写真2. トーンチャイムアンサンブルで使用する楽譜（マーク済）  
（※今年度使用した楽譜とは異なる）

担当音へのマーキングは、ハンドベルクワイア等においても初心者が活用する方法である。視覚的に見やすくなる上に、楽譜全体ではなくマークした箇所だけ追えば良いため、スムーズに演奏に移行することができる。初心者や読譜に自信が無い演奏者に対しては有効な方法である。一方で、演奏に慣れてきてもマークした箇所しか見られない、マークミスや塗り忘れに最後まで気付かない、などのデメリットもある。担当音だけでなく、楽譜全体を見られた方が音楽理解にも繋がるのは事実である。しかし、スムーズな読譜のためにはトーンチャイムだけでなく、ピアノや歌など日ごろから楽譜に慣れているということが重要である。楽譜は模様を見るように（全体を見てぱっと理解できるように）見るのが理想であるということは、学生に常に伝えている。

### ③メンバー主導のアンサンブル

一般に合奏、特に人前で演奏する本番のある合奏では、指揮者の指揮によって、演奏の始まり・終わりや強弱・速度の変化を合わせるが、本実践では指揮者によらず、メンバーが自分たちで呼吸を合わせることを指導している。演奏は横一列に並んで行うので、並び方を少しずらして顔を出せば、演奏中でも他のメンバーの動きを見ることができ、比較的合わせやすい。例えばリタルダンドによって速度が変化する箇所などは、あらかじめ決めた演奏者が主導で速度を変え、他の演奏者がその動きを見て速度を落とす感覚を合わせる。また、同じ音型（例えば和音の連打、同じ伴奏形の連続）の箇所で、誰かが速度を速めたりしないよう、左右の演奏者の動きを見ることによって、テンポを一定にする効果もある。

また、演奏開始・終了時のいわゆる作法も全員で揃えて行う。全員が準備を終えたら手を下におろし、あらかじめ決めた演奏者が楽器に手を置いたら全員置き、胸の高さまで持ち上げたら全員それに従い、1音目に出てくる演奏者が

呼吸をそろえて演奏を始める、という流れである。本来指揮者が指示することを演奏開始前からメンバーが行うことで、一体感と適度な緊張感を生み出すことができる。

指揮なしのアンサンブルは、聴衆にとってもアンサンブルの様子が分かりやすく、演奏者の一体感を直接感じることでできる形である。演奏者は、演奏中も自分のパートだけにとらわれず、他者と強弱やタイミングを合わせるなど、「皆で合わせる」ことを経験することができる。

### 2-3. 実践を経験した学生のコメントから

12回の練習を経て、今年度も無事に「純心こどもの国のクリスマス」が終了した。学生は落ち着いて本番に臨み、いくつかのミスはあったものの、練習の成果が十分に発揮された本番となった。

終了後、授業の最終回では、全員で本番の録画映像を鑑賞し、課題レポートを作成した。レポートは次の設問に答えるものであった。

1. トーンチャイムのアンサンブルを経験する前と後で、あなたの何が成長しましたか。「音楽面」「その他」の2つについて考えを述べなさい。
2. 「1.」の内容があなたの今後にどのように活かせるかを考えて詳しく書きなさい。
3. 鑑賞した本番の演奏について、感想や反省を書きなさい。

「1.」は、学生にトーンチャイムアンサンブルの実践を通して何が成長したかを自己省察させるねらいがある。音楽面の成長はある程度回答されることが予想されたため、あえて音楽以外の「その他」の成長を考えさせるよう促した。「2.」は、この実践を保育士養成課程で行ったことで、各自の今後（学年が様々なので就職後、あるいは今後の実習や子どもと関わる機会も含めて）にどう活かせるか、授業実践と自身の今後を結びつけて考えさせる意図がある。

「1.」の「音楽面」についての回答は、主に次のようなものがあった。

- ・強弱の工夫ができるようになった。楽譜に書かれていなくても自然な強弱変化を読み取り、演奏に反映させられるようになった。
- ・テンポを一定に保つことの重要性を理解できた
- ・音符に書かれたリズムをすぐに打てるようになった
- ・細かな拍がとれるようになった。例えば1拍目の裏、2拍目の裏などは、ピアノではあまり意識してこなかったが、今回の曲で伴奏を担当して裏拍というものがよく分かった
- ・音符の長さに注意することができるようになった
- ・楽譜を先読みする力はかなり伸びた
- ・相手の音を聴きながら演奏する力
- ・楽譜に「1 2 3 4」と書き、どこが何拍目かわかるようにした
- ・音を遠くに届ける鳴らし方ができるようになった

続く「1.」の「その他」では、主に次のようなものがあった。

- ・全員でひとつのことに向かって努力するという場面は他にない。協力し、ひとつになることができた
- ・役割を全うしようとする力がついた
- ・自主練習を通して、チームワークが円滑になった
- ・自主性や積極性が高まった
- ・プレッシャーに耐える力が少しいた
- ・分からないところは積極的に質問できるようになった
- ・周りの人と合わせる大切さを知った
- ・みんなで頑張ることの大切さを知った。みんなでやっているという雰囲気が好きだった
- ・練習しながら、みんなで思ったことを共

有できるようになった

- ・ひとりの演奏では経験できない、全体の音に合わせるということの大切さを知った
- ・周りを聴く能力と見る能力がついた
- ・演奏だけでなく、練習の過程でのチームワークの大切さを経験した
- ・お互いに教え合ったり、聞きあったりしたのが良い経験だった

「2.」については、主に次のような回答があった。

- ・1人で乗り越えなければと思ってしまい、そんなことでも、他の人と協力できる関係を作っておくことが重要だと思った
- ・人に教えることができ、自分も頼られる存在になれると分かった。不安が少し解消された。
- ・自分の一定の役割、必要とされているということの自覚
- ・リーダーなんてなれる訳ないと思っていたが、今回の経験が自信につながった
- ・失敗してもフォローし合えるということ
- ・みんなで試行錯誤すること
- ・みんなと一緒にできるということ
- ・私のように音楽が苦手な子どもにも、「どのように工夫すれば理解できるか」を寄り添いながら教えたい
- ・互いに信頼し合うこと
- ・ひとりよがりにならずに、周りの状況をよく理解すること

### 3. 考察

最終回の課題レポートの回答を通して、保育士養成課程の学生に対するトーンチャイムアンサンブルの意義を整理したい。

#### 3-1. 音楽面の成長

養成課程の学生にとって最も身近な音楽実践は、必修でもあるピアノの授業である。全員がピアノを経験しているが、アンサンブルはソロの演奏で経験できない学びがあり、そのことに

関する回答が大半を占めると予想していた。しかし実際には、アンサンブルを通して、ピアノで学んだ音楽の様々な事柄に関する理解を補強できたり、実践を通してより深く学べたという回答も多かった。例えば「テンポを一定にする」ことはソロの演奏でも必要だが、アンサンブルにおいては全員でテンポ感を揃える必要がある、ソロよりも緊張感の高い状況になる。また「裏拍」については、たしかに1人でピアノを演奏する際には、裏拍だけに注目する場面はそれほど多くなく、なんとなく弾けてしまうこともある。トーンチャイムでは、表拍はなく裏拍だけ鳴らすという場面も多々あり、これがタイミングとして難しいので、裏拍を強く意識したり、理解したりするきっかけになったのだと思われる。

学生にとって、ピアノにおける音楽の学びと、トーンチャイムアンサンブルでの音楽の学びが、別個のものではなく、各自の実践の中でうまく融合されていることが分かった。

### 3-2. その他の成長

この項目の回答では、「チームワーク」「積極性」「みんなで頑張る」「お互いに教え合う」などの言葉がよく見られた。これらについては予想の通りであったが、学生にとって、「演奏を良くしていく」とことと同じくらい、「皆で一つのを創り上げる」という側面の重要性が大きいことを実感した。

また、トーンチャイムアンサンブルの大きな特徴の一つは、「お互いに教え合う」という学生の行動にある。すなわち、音楽が得意な誰かがリーダーシップをとり、苦手なメンバーに教えるという一方のコミュニケーションではなく、教えたり教わったりするという双方向の協働の関係性ができるのである。これはトーンチャイムという楽器の大きな特質である。他の多くの楽器と異なり、トーンチャイムはほぼタイミングの楽器と言って良い。音程やハーモニーといった音楽の他の要素がほぼ干渉しない

ため、鳴らすタイミングさえ正確であれば、誰でも「できた」という実感を持つことができる。歌うことや、いわゆる旋律楽器を演奏することが不得意でも、正確なタイミングで鳴らすことは問題なくできるというケースは多い。ここで、普段音楽は得意ではないという意識の学生も、誰かのタイミングの誤りを正したり、アドバイスする役になることができる。そのような学生にとって、トーンチャイムアンサンブルはとても大きな自信に繋がる。誰でも指導者になり得るということは、トーンチャイムアンサンブルの大きな特徴である。

### 3-3. 今後活かせること

「その他の成長」の項目と類似した回答が多かったが、より具体的な記述がみられた。中でも目立つのは「みんなで」という言葉であった。「みんなと一緒にできる」という言葉は、心理学者ヴィゴツキーが提唱した「発達の最近接領域」そのものである<sup>5</sup>。

学生の回答からは、日々の生活や学修において、みんなで何かするという場面がそう多くないことが窺えた。音楽においても、ピアノの学修はひたすら自分1人で練習する時間が圧倒的に多い。とりわけ苦手意識を持つ学生は、孤かな状況の中で苦戦しているのであろう。そんな彼らにとって、みんなで練習し、その先に一つのもので完成する、という経験は、1人では分からなかった疑問を解消し、持てなかった自信を持つことのできる機会であったのではないだろうか。

トーンチャイムアンサンブルを通して得られた自信や達成感は、学生の将来を考える助けにもなっているようである。「保育士は子どもたちから頼られる仕事なので、人に頼ることの多い自分には不向きであると思っていたが、(この実践を通して)自分でも頼られる存在になれることが分かった」、「私のように音楽が苦手な子どもに寄り添い、どうしたら理解できるかを一緒に考えたい」、「失敗を恐れすぎない。フォ

ローし合うことが仕事の現場でも大切だと思う」など、具体的に将来の仕事と結びつけた回答もみられた。

大学において、他者とチームワークを発揮させながら何かに取り組むこと自体、学生にとっては貴重な経験である。ともすれば得意不得意がはっきり分かれがちな音楽において、取り残される学生を作らずに、多くの学生が自信を持ち、「みんなと一緒にならできる」という意識を持つことができるのなら、トーンチャイムアンサンブルには高い教育的意義があると断言することができるだろう。

#### 4. 終わりに

本稿では、保育士養成課程におけるトーンチャイムアンサンブルの実践を振り返った上で、トーンチャイムという楽器のもつ教育的意義について考察を行った。養成課程における実践の特徴として、最後に付け加えたいことがある。

この実践を経験した後、希望する学生は、学童保育に通う小学生にトーンチャイムアンサンブルを指導する活動に参加している。近年は参加希望者が非常に多く、数名に分けて参加してもらっている。参加者をみると、必ずしもともと音楽が得意な学生ばかりではない。やはり自身の経験を通して、「自分でもできる」という自信や責任感が芽生えるのではないだろうか。そして何より、アンサンブルの楽しさを今度は子どもたちと一緒に経験したいという意識に転じるのであろう。学生の学びが子どもとの触れ合いに還元されていくというあり方は、養成課程での学修のあり方として非常に意義深い。今後は、トーンチャイムを通じた学生と子どもたちとの関わりについても追跡調査を行い、トーンチャイムアンサンブルの意義をより広範に捉えることを目指したいと考えている。

#### 5. 参考資料

〈文献〉

ヴィゴツキー著、土井捷三、神谷栄司訳（2003）

『「発達」の最近接領域』の理論—教授・学習過程における子どもの発達』三学出版

松川垂矢（2019）「トーンチャイムの演奏活動がもたらす成果と課題：音楽経験の差による活動の相違に着目して」『至学館大学教育紀要』21, 37-55.

〈映像資料〉

「クワイアチャイムという楽器」（日本ハンドベル連盟オンライン講習会，講師：キャスリーン・ショウ（マルマーク社副社長）  
2023年5月9日視聴）

〈ウェブサイト〉

スズキ楽器ウェブサイト

[https://www.suzuki-music.co.jp/product\\_category/tonechime-and-bellharmony/tonechime/](https://www.suzuki-music.co.jp/product_category/tonechime-and-bellharmony/tonechime/) 2023.1.10 閲覧

- <sup>1</sup> 日本ハンドベル連盟オンライン講習会におけるキャスリーン・ショウ氏の講演「クワイアチャイムという楽器」より（2023年5月9日実施）
- <sup>2</sup> 同上
- <sup>3</sup> 同上
- <sup>4</sup> スズキ楽器ウェブサイト [https://www.suzuki-music.co.jp/product\\_category/tonechime-and-bellharmony/tonechime/](https://www.suzuki-music.co.jp/product_category/tonechime-and-bellharmony/tonechime/) 2023.1.10 閲覧
- <sup>5</sup> ロシアの心理学者レフ・ヴィゴツキーが提唱した理論。自力では難しいが、誰かのサポートを受ければできるようになることの領域を表す。